

村人と一緒に見つける技術

和田 信明(ムラのミライ 海外事業統括)

菊地 綾乃(ムラのミライ 海外事業コーディネーター)

セネガルプロジェクトが始まった2017年、ムラのミライに入職し、約1か月の日本事務所勤務を経てセネガルに赴任した菊地綾乃。新鮮な目で見えたムラのミライの活動方法論と、彼女自身がそれを身につけてきた様子を、師匠の和田信明と共にふりかえりました。

最初に見た研修 プロジェクトの進め方

菊地：セネガルに赴任したのは2017年5月9日。2日ほど街中のホテルに泊った後、ダカールから70キロほど離れたンブルという町に移動しました。翌日から村での研修。最初はンディヤマヌ村でした。村の中心地にスペインの支援で作った私立の小学校が建っていて、その一室、ちょっと薄暗い部屋をお借りしてやりました。

和田：どういった話の入り方をしたか覚えてますか？

菊地：洪水というキーワードから始まって、水が流れていくとどうなるのか、土はどうなるのか、それにはどういう意味があるのかというところから始まりました。



村の地図も書いてもらって、水の流れも紹介してもらったんですけど、和田さんが「この村で洪水が起こったのは、いつからですか？」と聞いたのが切り口だと思っています。

和田：その質問を聞いて、どのように会話が進むと思われましたか？

菊地：全然予想ができませんでした。

和田：洪水のことを聞いてから、和田は結論をどういう風に持っていきましたか？

菊地：洪水がいつから起きたのかを聞くと、洪水が起こり始めたのは最近だったんですね。その後に村の中を歩きながら、昔と何が違うのか、メカニズムを説明していたのを覚えています。砂を見て状態を確認する。なめてみるとしょっぱい。「しょっぱいと農業ができないよね、どうしてこういう事が起きるのだろう」と問いかけながら村を歩く。戻ってから何を見たかをふりかえる。そして洪水の起こるメカニズムに戻り、最近起きた事、つまり雨が降った時、土が吸水する機能を果たせてないことを理解する。たとえば土に植物が何もないさら地があって、そういう土地では雨が降った時に洪水が起きていた。木や草が生えているところでは、雨が降っても吸水して、水が保たれていたということに気づく。



和田：このプロジェクトは何をするものかという事を、最初に研修を見た時に考えましたか？

菊地：三つの村での研修に同行して、農民たちが村のことを観察したり、ふりかえったりしながら、自分たちの村で何が起こっているか気づく、それに対して自分たちで行動を起こせるように背中を押す、という事が研修でも良く見えました。

赴任前に、日本で何度かメタファシリテーションの講座を受けていました。

講座では1対1で練習しますが、村での研修は1対複数なので、研修生から色々な答えが返ってくるんですね。基本的なやり方は同じだと思うのですが、とても高度に感じました。

一人に対しても質問を繰り返すのが難しかったので、複数に対し、色々な答えに対して、自分を見失わないように目指す所に行くというのが大変だと、村での研修に何度も同行するうちに分かりました。

観察と聞き取り

和田：村での研修に初めて同行したとき、他に何かしましたか？

菊地：一緒にいた中田からクイズを出されました。研修会場の部屋を見て、「何か気づいたことは？一番新しくされたことは何だろう？」というクイズ。良く見ると、色々な本やDVDのある本棚があり、使われてなさそうなテレビもあり、また黒板に文字も書かれていた。私が「黒板の文字ではないですか」と言ったら「いや違う、壁を見なさい」と。見ると、セメントの壁の一部に濃い色、粘土質の部分があって、修理した跡だった。そこから会話に入れば、保護者の役割や先生がどう修理することになったのかを聞ききっかけになる可能性がある…という説明をされました。

和田：観察しろということだね。ンディヤマーヌ村でそう言われたことを踏まえて、自分で何か観察をし、記憶に残ったことはありますか。

菊地：観察が大事だなと思って、観察しようとしたんですが・・・

和田：何を観察したらいいか分からなかったんですね。

菊地：そうですね・・・たとえば村を歩いていて、木の近くの土に大きなくぼみがあったんです。何だろうと思っていたんですけど、答えは出ませんでしたね。けれど、こういうところを聞いていたら良かったのではないかと。

和田：村で何度もホームステイをしたそうですね

菊地：ンディヤマーヌ村で一回、ンディアンダ村で一回、バガナ村で二回、ンディアンダ村で三回くらい泊めてもらいました。長い時は五泊しました。

和田：泊まってみて、生活を体験して、それまで知らなかった発見はありました？

菊地：食について。食事を共にすることも多いですし、作る過程も見られるので。例えば、ダカールに比べて、ヒエのクスクスを良く食べる。セレール族はそれが好きと聞きます。村のお家の庭先に行くと、何かの葉っぱを干してある家がまばらにあったのですが、それがバオバブの葉だと気づきました。バオバブの葉を乾燥させて粉状にさせ、ヒエのクスクスに混ぜると、ばさばさ感が無くなるということで、どの村でもバオバブの葉を使っていました。葉っぱの使い方を初めて知りました。

和田：食べ物をごちそうになるだろうけど、どういうところを観察してた？

菊地：誰が作ってるとか、材料とか、調理時間、調理道具、食べ方とか。

和田：食材の買い物は誰が行ってました？

菊地：家の中の若い女性ですね。息子のお嫁さんとか、娘さんとか。セネガルは、従兄弟、おじさん、子ども達、おじいちゃんおばあちゃんも一緒に住んでることが多くて、イスラム教が多いんですけど、男性が複数の妻と一緒に住んでることも多くて、ご飯をつくる順番があるので、担当の女性が、買い物と料理をしていました。



和田：昔から村で食べてる食材以外に、どういう食材が入ってきたか聞いたことある？

菊地：輸入しているお米が多くて、タイとかインドとか、インドネシアとかから、村や大きな町の商店に来ている。また、村で化学調味料を使っていたんですが、チェブジェンという魚の伝統的な炊き込みご飯を作るのに使われてて、それも伝統的なものでなかった。

和田：そのような化学調味料を使始めたのはいつごろ？

菊地：聞いた事がないです。

和田：例えば、おばあちゃんが

「昔はコレ使ってなかったわ〜」とか？

菊地：おばあちゃんに聞けばよかったのか・・・男性に聞いてしまいました。

和田：その男性は料理していなかった？

菊地：していなかったです。

和田：他に料理してる男性見なかった？

菊地：はい。和田さん以外（笑）



村の人たちの変化を聞き取る

和田：赴任して二年ほど、研修に同行する以外に、月に一回のペースで、研修をやった村をモニターしてフォローしてくれていますね。その中で、村の人が何かに気づいた、また変化があったということがあれば、具体的に話してください。

菊地：収支やコストを計算する研修をおこなった後のことです。ンディヤマーヌ村のある農民は、玉ねぎを生産していて、多く獲れていたので、自分も周りも「儲かっているな」と言っていたんです。でも研修の後で、売り上げやコストの計算をしてみたら、むしろ赤字に近いようなことがわかった…という話を聞きました。

それから、水についての研修では、水やりは朝にした方がよいという話をしていたんですね。研修に参加した人たちは、水やりを夜にしたり、一日に何度もしたりとバラバラでした。ある人は、それまでは朝に一回、午後に井戸水が戻ってくるのを待ってもう一回と、一日に二度水やりしていたそうです。彼は研修を受けた後、水やりを朝だけにしたところ、井戸に水が溜まるようになり、水が足りるようになったことに気づいたそうです。

また、農民の話ではないんですが、ンディヤマーヌ村に泊めてもらった時、魚売りのおばちゃんと話す中で、魚はどこから持ってくるの、輸送費はどのくらい、この魚は/氷はいくらかなどを聞いていったら、儲けが1回あたり200フランしかないことが分かり、儲けが少ないということにおばちゃんが気づいたということがありました。

二年間の赴任を経て

和田：今まで二年間セネガルに赴任して、特にこういうことが自分でできるようになった、またできるようになりたいなという事は？

菊地：ウォロフ語ができるようになって、農民の方や女性ともスムーズに、笑いながら話すことが出来るようになりました。でも二年いると、慣れてきてしまって、最初の感動や驚きが薄れてしまった気がします。二年前は聞きたいことがあるけど言語が出来なくて聞けなかった。今は言語は出来るけど、最初の驚きが薄れてしまって聞けない・・・というか、もっと突っこんで聞けるようにならないと。

和田：いつまでも新鮮なんてことはありえない。ただ、何かを発見していくってことは常に続けていく。だから感動が薄れたというよりも、聞き方がまだまだということだね。

でも、このインタビューから、二年間で着実に成長していると言えるので、いいんじゃないでしょうか。

菊地：ありがとうございます。

農村で暮らし続けるためのファーマーズ・スクールプロジェクト

どこで セネガル共和国ティエス州ンブル県ンゲニエヌ行政村

だれと 16~24歳までを中心とした青年300人

活動のパートナー Intermondes(アンテルモンド) ※セネガルのNGO

支援パートナー JICA「草の根技術協力事業パートナー型」

なにを セネガル農村部に住む主に若年層の農業従事者が、自分たちの地域において、自然資源を活用しながら農業で生計を立てられることを目標とした事業。水や土を守りながら農業の効率性を上げる知恵を共有し、実践を定着・普及させていくために、研修や農業実践の場の提供(ファーマーズ・スクール)を通して、農民たちの活動を支援しています。

